V 戦士

徳島県バレーボール協会中学校専門部便り春季５１号

徳島県中学校バレーボールの奇跡

『四国中学生バレーボール選抜優勝大会』誕生と黎明期

高橋　利明

バレーボール競技がオリンピックの正式種目になったのは１９６４年の東京オリンピックである。（１９９６年アトランタ五輪からはビーチバレーも種目に加わった）

徳島県の中学校では、昭和４６年度から９人制と６人制の試合が行われたが、先んじて昭和４４年３月、四国において６人制ルールを普及させるため、各ブロックで審判講習と併せて『四国中学生バレーボール教室』が開催された。四国各県から男女各１チーム（開催県からはさらに１チーム加わった）がモデルチームとして参加した。当時、交通手段が現在ほど十分ではないため、たとえ四国内といっても移動がままならず、四国のトップチームが競い合う強化合宿の色合いが濃かった。

この『四国中学生バレーボール教室』にメスを入れたのが私（当時、徳島県バレーボール協会中学校副専門部長）だった。平成４年３月の常務理事会において“大会化への移行”を提言した。これに、生田豊徳島県バレーボール協会長（兼四国バレーボール連盟会長）が賛成して計画を進めることになった。

しかし、他県の反応はいいものではなかった。その理由は、「１．現状維持で特に問題はない。２．“指導普及”の大会なのか“強化”の大会なのかはっきりしない。３．競技方法・方針をどうするのかわからない。４．運営費に支障が起こる。（スポンサーを見つけてこられるのか）」というものである。

しかし、この頃には高速道路もでき、四国内の移動が以前よりスムーズになっていた。そのため、県外との交流（練習試合）も盛んになった。それなのにわざわざ役員を集めて、練習試合と同じようなことをする意義が果たしてあるのか。もっと四国の中学生バレーボールが発展できるようにする方法を考えて行っていくことの方が大切ではないかと反論した。

すでに大会名・競技方法・協議方針は考えていた。

大会名については『第〇〇回四国中学生バレーボール選抜優勝大会』とした。その理由としては次の通りである。

①“第〇〇回”について

“元号を使っての〇〇年度”という形を使わずに“第〇〇回”という数を使う。（当

時は平成が始まったばかりだったが、今後新しい元号になることもあり得る。また、全国大会など大きな大会では回数で表現している）

②“四国”について

地域名を使用する。

③“中学生”について

実は、《中学校》と《中学生》の意味が違うことを初めて知った。《中学校》は学校体育（部活動）、《中学生》は社会体育であるということだ。確かに、《小学生大会》はあるが《小学校大会》はない。さらに調べてみると（四国中学生バレーボール選抜優勝大会選考会をつくるときも困ったことだが）、文部省（現在の文部科学省）や教育委員会が認めている部活動の大会は、県大会は３回、ブロック大会は１回、全国大会は１回までというものだった。ここにきて行政の壁が立ちはだかったが、《中学生》という形で難を超えることにした。（後にさらなる難が待ち構えていた）

④“バレーボール”について

競技名を明記する。

⑤“選抜”について

「各県バレーボール協会が出場するチームを推薦する」ということを表現した。各県によって出場するチームを決定する際、様々の方法があると思われるが、それについては各県バレーボール協会が決めることである。

⑥“優勝大会”について

徳島県で全国産業人の９人制バレーボール大会を開催したとき、“優勝大会”とあった。また、春高バレーが３月に開催されていたときに“優勝大会”となっていた。その理由をあるとき徳島県バレーボール協会・常務理事会で聞くと、「チャンピオンチームを決めるのは『選手権大会』、その次のチームを決めるのは『優勝大会』」とのことであった。四国のチャンピオンを決めるのは『四国中学校総合体育大会』である。そこで、春休みに開催するのだから『優勝大会』とすべきだろうと考えた。

競技運営・方針については、『四国中学生バレーボール教室』を周到していかないと賛成してくれないだろう。そこで、

①運営方針は「指導普及」。これからバレーボールに携わる人口が減少しないようにするため、これまでより多くのチームの出場を可能にし、試合数も多くする。

②競技方法は各県より男女２チームが参加し、２つの予選リーグを行い、大会２日目も全チーム参加させ、３位決定戦を行うということにした。これにより、試合数を文部省・教育委員会が示す“１日３試合”までという規定を目一杯利用する。

とした。

四国バレーボール連盟総会において生田豊会長（徳島県バレーボール協会長兼四国バレーボール連盟会長）の後押しもあり、残りの課題は運営費（スポンサーをみつけること）になった。

当時、「さわやか杯（現在のＪＯＣジュニアオリンピック都道府県対抗中学バレーボール大会）」が誕生し、その結団式を夏休みに実施していた。それとは別に、コカ・コーラジュニアサーキット（コカ・コーラがスポンサーになって、多くの中学生が参加す

るバレーボール教室。日本バレーボール協会が全日本の選手男女各１名を呼んで競技力向上を図る。当時、中学生男女併せて１００名以上は参加していた）を行っていたが、参加役員も少ないため運営に困っていた。そこで、さわやか杯の結団式後にさわやか杯出場選手を対象にしたジュニアサーキットを行うようにすることによって対応するようにした。どちらもコカ・コーラボトラーズ株式会社の主催だったため、上手く移行することができた。

その３年目、四国コカ・コーラボトリング株式会社徳島営業所でこの打ち合わせを行った後、「春休みに四国大会を開催したいのでスポンサーになっていただきたい」と営業所長に嘆願した。営業所長は困惑した表情で実は、小学生の四国バレーボール大会へのスポンサーを提案したのは徳島営業所です。小学生も中学生も“徳島から”ということになれば本社が“ＯＫ”することは難しい。できれば、他の営業所からの提案ということで、それに賛成するというのはできます。（本社へスポンサーになることを提案することは）難しいと思います。」という返答で、他を探すしかないと感じた。けれどもその約半年後、四国コカ・コーラボトリング株式会社からスポンサー承諾の返事があった。その条件としては、①四国コカ・コーラボトリング株式会社の本社は高松にあるため第１回大会は香川県で行うこと。②大会での飲料はコカ・コーラ製品以外を使用しないこと、などだった。そこで、その年に開催される『四国中学生バレーボール教室』は愛媛県だったため、四国中学生バレーボール選抜優勝大会のプレ大会とした。このとき、次年度に行われる競技方法をそのままの形で行った。

スポンサーに関しては、この他にも明星ゴム工業株式会社（現在、株式会社ミカサ）・株式会社モルテンに優勝旗と試合球の提供を依頼した。（スポンサーの代償として無償によるプログラムへの広告掲載などを契約）

翌年の平成７年３月、香川県善通寺市民体育館で第１回大会が開催された。開催にこぎつげただけでなく、このとき、男子は南部中学校、女子は相生中学校と徳島県からの２チームが優勝し、私は感無量の思いだった。提案してから２年半での開催は奇跡であり、それは多くの方々の協力・尽力の賜であった。

第２回大会は、徳島県で開催された。四国大会である以上「買ってでも欲しいプログラム」をつくらなければならないという思いでプログラムを作成した。四国コカ・コーラボトリング株式会社にも依頼し、コカ・コーラの広告（無償）を載せた。プログラムの売上金は運営費に充てることにした。大会役員の飲み物、チームの弁当につくお茶などを全てコカ・コーラ製品に徹底した。

また、生田豊会長がチームのため、引率する先生方の身分保障のため、県教育委員会の後援を取り付けてくるよう指示された。奥村健策先生（当時、中学校専門部長）と一緒に県教委へ後援の依頼文書を持って行くが門前払いに終わった。「社会体育には後援しない」「そのような類いの大会への後援は他競技も断っている」というのであった。生田豊会長に報告すると「県教委の後援なしでの大会開催はありえない。」ということで、再び県教委に出向く。結果は同じだった。三度県教委へ訪ねると、今度はすんなりと了解された。後でわかったことだが，その裏で生田豊会長の尽力があった。（それ以降、四国４県の県教委の後援ができるようになった）

平成３１年３月、平成最後の大会が徳島県で開催された。少子化によるチーム数の減少やマスメディアを通じて様々なスポーツ球技が報じられるようになり、時代は大きく変化していることを実感している。これまで以上に多くの中学生がバレーボールに親しみ、競技力向上につながる大会にする“とき“がきているかもしれない。